

北陸大学 紀要
第11号 (1987)
pp. 165~194

西ドイツのオルタナティブ運動試論—概観と関連年表

田 村 光 彰*

Versuch über die Alternativbewegung in der Bundesrepublik Deutschland

Überblick und zusammenhängende Zeittafel

Mitsuaki Tamura

Received October 28, 1987

〔1〕はじめに オールタナティブ運動とは何か

(1) 訳語 オールタナティブ Alternative の辞書的な意味には、次の2つがある。(1) 2つのとるべき可能性を前にした、いずれか一方の選択、(2) 既成の選択に代って、2つまたは多数の可能性の中から、1つを選んで対置すること。(1)では、2つの選択肢は価値としては等価であるが、(2)では既成の選択肢は否定され、乗り越えられるべき価値と見なされている。西独のみならず、とりわけ先進資本主義国に広まっているオールタナティブの思想は(2)に基いている。

Alternative の日本語訳としては次のような語があてられてきている。(1)「社会的にみて既成の文学コミュニケーションにたいし、『もうひとつの文学コミュニケーションを志す運動』」(傍点筆者、以下同じ) (2)「オールタナティブ(代替社会)をめざす」(3)「ケルンに花開く対抗文化」。(2)と(3)では「社会」、「文化」をも含めて訳語としている。(1)~(3)いずれにも共通している視点は、既成の文学、社会、文化がもつ価値感への単なる反対や抗議ではなく、これらに対置される新しい創造である。オールタナティブの運動に参加する主体から見れば、社会参加である。私は、この本稿においては第一に、文化、社会という個別カテゴリーを使わないでいながら、これらを包含し、第二に、創造と参加を特に意識して選ばれたと思われる「対案実現」⁽⁴⁾を適語と考える。

(2) 規定 『草の根運動の現代的位相』(高田昭彦)にならって、オールタナティブ運動を「各自の日常生活の中から発想された問題に対して、生活者としての個人が自発的に参加した社会運動」⁽⁵⁾と規定したい。以下、この規定をもとに、オールタナティブ運動を、運動形成の要素、組織、参加者の意識に分けて叙述したい。

* 教 養 部

Faculty of General Education

② オールタナティヴ運動形成の要素

(1) 社会的契機 社会的契機としては、危機感を抱かせる事象の発生、存在があげられる。ドイツ史をふり返れば社会民主党は1959年11月のゴデスベルグ基本綱領によって、党結成以来、堅持は名目だけで、実際はたてまえとしてのみ残していたマルクス主義を捨て、「はっきりと体制内存在」へと変る。重要産業の国有化から市場経済に依拠する「可能な限りの競争」へ。60年にNATOの肯定。66年12月、保守二党と共に連立政権（保革大連合）を樹立。議会では保守二党と社民党の中間に位置する最小勢力の自民党のみが野党となるが、実質的には、批判勢力を欠いた、「野党のいない議会」が続く。69年9月、大連合に代わり、社民党—自民党の連立政権（ブランド首相）が成立する。この連立政権下で、原子力発電の増設、ヒロシマ型原爆が3百万発世界中に蔓延している時に、更に加えて米新型核ミサイル、パーシングⅡ108基と巡航ミサイル96基を配備するNATOの「二重決議」の受け入れがなされた。企業の重金属たれ流しが容認され、「運河の泥土のなかには、ヒトに嘔吐を伴う下痢を誘発し、少量でも微生物を殺す銅が、例えば基準値の314倍にも達し………重度の神経障害と麻痺を惹き起こす水銀は、基準値を70倍も上まっている。ガンを発生させるヒ素は63倍、脳と血行に障害を与える鉛は32倍………」⁽⁶⁾という環境汚染が広がった。核戦争の危機と全生態系の汚染は、運動の社会的契機を形成した。

(2) 主体的契機 ここでは価値観の転換とリーダーの存在という2点を挙げよう。

①価値観の転換 戦争と環境汚染の危機、差別と抑圧という社会的事象を乗り越える対案を支える視座は、人間と自然との共生、人間と人間との共生という思想である。この思想は西欧思想＝「人間による自然の抑圧」とする俗説によって無視されつづけてきた。人間も全生態系の一部であり、部分は全体と関連し、結びついている、とするエコロジーの思想は、地に深く沈潜し、遠くギリシア思想から、中世の神秘主義、フランチェスコ派、スピノザ、ロマン主義、ハイネ、ゲーテ、フォイエルバッハ、マルクス主義、リルケ、シュヴァイツァーそしてルドルフ・シュタイナーらに脈々と流れている。「エコロジー・平和——これは生命をおびやかすあらゆるものに対する抵抗を含めて、生命をいつくしむことである。」⁽⁷⁾この章では、エコロジー・平和を基に1980年、多種多様なオールタナティヴ運動を統合し、議会外住民運動と議会の双方で対案実現をくりひろげている緑の党の人の流れにのみ着目してみよう。

社民党も保守二党、それに自民党も経済成長と国民総生産の増大を最優先させる点で全く変わりはない。「緊張緩和政策以外に差異はない」⁽⁸⁾ために、これらの政党にエコロジー・平和を主題とする価値観の転換を求めることは無意味である。緑の党の中には、自然との共生、人間と人間の共生を求めて既成政党や既存グループから訣別してきた人は多い。保守党のキリスト教社会同盟からはヘルベルト・グルールが党創設者の一人として参加。著書『掠奪される惑星』は、75年に出版され、2年間で20万部が売れ、ベストセラー入りを果たした。現連邦議会議員アルフレート・メヒテルスハイマーは、バーデン＝ヴュルテンベルク州でかつては保守党のキリスト教民主同盟員。社民党からはかつて党代表の一人ペートラ・カーリン・ケリー。バーデン＝ヴュルテンベルク州議会議員を務めたハーゼンクレヴァーは、77年に社民党が原発政策の継続を党大会で決議した直後、党に脱党届をだした。ブレーメン市緑の党創立者の一人、オラーフ・ディネは社民党に訣別をし、初めてエコロジー的政策と、教条的左翼との相違を理論化した。左翼グループからは元ドイツ共産党KPDのヴィンフレート・クレッチュマンや、

ディーター・クンツェルマン、共産主義者同盟KBからはライナートランペルト、トーマスエーバーマン。後の2人のうち前者は前党代表、後者は現党代表の1人である。共にマルクス主義とエコロジーの価値観の統一に、努めている。西独史上初の緑の党と社民党との連立政権下で、環境大臣に就任したヨシュカ・フィッシャーは、フランクフルトの非教条左翼“Sponti”からエコロジー・平和の価値観に共鳴して緑の党に参加した。

人間と自然、人間と人間との共生をめざす視座は、権力の一点への集中や統合を廃し、分権と各個人の自立による連帯をめざす。この点で東欧の現存する社会主義も対案にはなりえない。東欧から参加した人々には、チェコの77年憲章の署名者であるミラン・ホラチェクがいる。また東独・社会主義統一党のエリート経済官僚で『社会主義の新たな展望』⁽⁹⁾を著わしたために8年の刑後、国外追放になったドルフ・バーロ。現在緑の党を脱党してはいるが、エコロジー・平和を求めて党創立に加わった一人である。

こうして保守二党、社民党、左翼、東欧社会主義のもつ既成価値観からの脱却が、オールタナティヴ運動の形成要素の一つを成す。⁽⁴⁾を参照)

②リーダーの存在 60年代の社会運動は、リーダーが、執行委員会なり運動委員会に加わってリーダーシップを発揮したが、70年代のオールタナティヴ運動では、委員会そのものが存在しないケースが多い。リーダーと運動体構成員との差はほとんどなく、ヒエラルヒーの構造をもたない。リーダーは2人以上いる場合が多く（「多頭的」⁽¹⁰⁾である）、固定化されていない。

③ オールタナティヴ運動の組織

(1) 原理 運動の原理は参加民主主義であり、分権、連合である。誰かに自分の意志を代行してもらうことが多い既成の運動は、意志・思想と行動・実践が分離しやすい。オールタナティヴ運動はこうした分離を避け、思想と身体⁽¹¹⁾の統一を目指す。参加者全員の討議で、決定した事項は全員の参加で実現していく。重視されるのは、決定することよりも、決定に至るプロセスであり、そのプロセスでの各個人の意識の変革と成長である。誰もが変わりうるのだ、というプロセスを大切にする。この点で緑の党は、結論のでていない党内の論争点について、その対立の論旨をそのまま綱領にも併記する。例えば、刑法第218条、いわゆる妊娠「中絶禁止」条項に関して、ザールブリュッケン綱領は次のように記した。「妊娠中絶の問題を論ずるとき、緑の党はふたつの根本目標の間で矛盾（傍点筆者）に陥ってしまう。つまり私たちは一方では男女の完全な自己決定を支持しようと意を固めているし、他方では人間のいのちはあらゆる領域で守らねばならないからである。」⁽¹¹⁾矛盾は、党の理論と運動の現在の一到達点である。他党はこうした緑の党の矛盾を指し、曖昧であると批判する。だが、このように批判する既成政党は、自身の党内で対立する両論はあたかも対立していないかのように粉飾処理をしがちである。

各オールタナティヴ運動体が矛盾を湖塗せず、対立点のどちらかを、上位の機関にかけて決着することを多くの場合に避け、今後の運動と理論の発展にゆだねる姿勢は、参加者の自発性を尊重することであり、同時に、「自由とは、異なる考えをもつ者の間の自由である」（ローザ・ルクセンブルグ）という自由観の現実化でもある。

このような自由観に基く運動体は相互に影響しあいネットワークを作っている。各運動体がネットワークの一部分であり、自律した組織である。こうしたオールタナティヴな運動体の一つとして連邦環境保護市民運動連盟BBUを挙げることができる。1972年創立のこの運動体は、

「勇気をもってもっと民主主義を」というブランド首相の発言の実質化を目標にした。千を超える各地の組織、約30万人が加盟するBBUでは、各グループの自主性と自立性を保障するために上からの指導、操作、動員は行わない。各グループは、互いに集中や集権を排し、連合を基にしている。

(2) 大きさ 参加民主主義、連合、分権を原理的特徴とする各グループは、構成メンバー数が膨張すると、原理そのものに抵触してくる。従って各オールタナティブ運動体は等身大を目指す。生産者との直接の流通ルートを拡大しているグループ、無農薬、有機農法の野菜を扱う生産者——消費者グループ。居住共同体を構成するメンバー。共同経営・自主管理をモットーに Reformnaus 自然食品の店やリサイクル運動に関わる人々。20万人以上がこうしたオールタナティブ企業に従事している。各グループは生活に根ざした地域運動といえる。この場合地域とは一般に、自転車でもまれる程度の広がりである。この広さはメンバー間の連絡を要易にし、参加民主主義を支える場となれる単位である。

④ 参加者の意識

ここでは運動を構成するメンバーの意識、価値観に焦点を絞り、次の特徴を抽出したい。(1) 地方と世界への帰属意識 (2) 万物との共生 (3) 非暴力 (4) 脱産業社会 (5) フェミニズム。すでに「オールタナティブ運動形成の要素」の章で、主体的契機の一つとして「価値観の転換」にふれた。そこでは、他党から縁の党の価値観に共鳴して入党してきた人々のみをとりあげた。一方、この1から5までの特徴もすべて、価値観の転換に係わっている。ここでは政党レベル以外の分野についての価値観の変化を述べたい。

(1) 地方と世界への帰属意識 運動の参加者には国家への帰属意識は極めて少ない。この理由は第一に、ナチスが目論んだドイツ民族—ドイツ国家による世界制覇への反省である。1985年5月8日、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領（キリスト教民主同盟）はドイツの国家主義にふれ次のように演説している。「ヨーロッパでは百年以上にわたって国家主義が余りにも高まり、その衝突に苦しんできたのであります。第一次大戦が終ると一連の平和条約が締結されました。しかし、これには平和を樹立する力が欠けておりました。国家主義的な激情の炎が再び燃えあがり、社会の窮状と結びつくこととなったのであります。」「国家主義」にあおられた「激情の炎」は、人種、宗教、イデオロギー、政治上異なる人々の肉体と意志も焼きつくしてしまった。国家への無批判な帰属意識の行きつくところは自国と世界の破局であった。

第二の理由は、地球規模の汚染の現実である。その第一は生産力至上主義によって生みだされたフロンガスや炭酸ガス等の化学物質の地球レベルでの蔓延である。これは地球の平均気温を上昇させ、都市の水没や耕地の砂漠化を促すだけではない。合成化学物質は大気中のオゾン層を破壊するために、人類が受ける紫外線量が増大する。これは皮膚ガンを発生しやすくする。同時に地球上の全酸素の2/3を生産している海中のプランクトンをも襲う。食物連鎖の中で、プランクトンに依存する全生物の生態系が破壊され、それは人類の生存そのものを脅やかす。汚染の現実の第二は、1979年のアメリカ・スリーマイル島と、1986年ソ連のチェルノブイリでおこった原子力発電所の事故である。汚染は国境を意に介しない。第三は全地球をおおう酸性雨であり、第四は、「核の冬」をひきおこす限定核戦争用の兵器をはじめとする大量の核兵器の生産である。こうした全地球規模での生態系の破壊をもたらす危機はみな国家的エゴイズム

の下で加速されてきた。オールタナティヴ運動の参加者は、国家主義ではなく、国境を超えた地球レベルに視野を据える。意識は世界、しかし行動は地域——すなわち、理念としてかかげられる地球市民の対案実現の場が地域である。生態系を守るエコロジーの思想は、地域→国家→地球から国家を意識的に欠落させ、地域と地球の相互連関を密にする。こうした視座が次の万物との共生の意識と連動する。

(2)万物との共生 オールタナティヴ運動に参加する人々の抱いている人間と自然、人間と人間との共生の視点はヨーロッパ思想の古い時代に源流をもつ。これまでくり返し流布されている「西欧思想＝人間による自然の抑圧・搾取、東洋思想＝人間と自然の調和」という単純な二分法は思想史への無知に由来している。第一に、西洋、東洋それぞれを共に一元的な文化圏とする誤りを指摘しなければならない。西洋といっても等質ではなく、少くとも島国のイギリス文化圏、アルプスの北の文化圏、南のラテン文化圏、東欧諸国文化圏等が存在し、東洋にはイスラム文化圏、中国・インド文化圏が存在し、更にこうした文化圏がそれぞれ異質の文化域を内包している。「西洋」「東洋」として一元化、単一化することは差異性を無視することになる。

第二に、「東洋思想が人間と自然の調和である」とすれば、今日の日本を含めた「東洋」の自然環境の汚染と破壊をいかに説明するのであろうか。植林なしの東南アジアにおける熱帯雨林の伐採、森林破壊。敦賀・浦底湾一帯の原発廃水による海洋汚染。光化学スモッグ、水俣病等による人間と自然への挑戦。観光道路建設がひきおこす緑の乱開発。酸性雨による森林の枯死。河川と湖沼の全国規模での汚染。ヘドロの海と化している海岸線、自然に還元できない化学物質による自然への抑圧。もしすべての社会的な諸事象のよってきたる原因を思想に求めることを正しい方法と前提すれば、ここには調和ではない、「東洋＝破壊の思想」もあることを指摘しなければならないであろう。

第三に、「西欧思想」として表現される実体の一つは、論者たちによればキリスト教でしかなく、しかも異端を含めない、正統キリスト教であり、この正統キリスト教をもって西欧思想を代表させる方法は、一部分をもって全体を結論づける手法に等しい。日本文化論のイデオログたちは「東洋思想＝調和、西欧思想＝抑圧」を人間と自然に定義づけるだけではなく、人間と人間の関係にもあてはめようとする。それは「戦闘的な西洋、平和的な東洋」観を生みだしている。そして戦闘性の例証として挙げられるのは、旧約聖書、創世記の次の箇所である。「神は自分のかたちにて人を創造された。(略)神は彼らを祝福して言われた。『生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と地に動くすべての生き物とを治めよ。』」

ところで、キリスト教を根拠とする「戦闘的な西洋」観を論理化するためには、少くとも次の命題が証明されなければならない。すなわち、キリスト教が、とりわけ先の創世記の部分が西洋という全域にわたって、人々の思想をおおいつくしていること、である。

だがこれは事実と反する。第一に、確かにパウロ・アウグスティヌス・トマス・アクイナスに流れる思想の一部には「生き物を治め」、生き物を支配、服従する視点がある。例えば、イエスが悪霊を「豚の群れの中につかわ」(マタイによる福音書、第8章31節)すと、豚の群れは「がけから海へなだれを打って駆け下り、水の中で死んでしまった」(同上、32節)というガダラの豚の事件について、アウグスティヌスは次のように述べている。「この挿話が教えているのは、われわれは動物に対して義務を負っていないということだ。」¹³⁾ だがこうした動物観に

対して(1)公認のキリスト教内に(2)そして異端とされた人々に(3)キリスト教の思想外に自然万物との「調和」を原点とする思想を歴史は数多く教えてくれる。

まず、(1)に関しては修道院には入らずに、使徒的な清貧に徹し、放浪説教を続けたアッシジの聖フランチェスコ。この伝導者は、動物にも隣れみの情を示した。アルベルト・シュバイツァーは生きとし生けるものすべての生命への畏敬を説いた。ニーチェの超人の思想からではなく、トルストイの博愛主義から畏敬の視点を学んだ。自然万物との共生の思想である。

次に(2)について例を挙げよう。中世は正統キリスト教の唯一の一元支配では決してなく、都市を囲む城壁の外側には多くの異端とみなされたグループが清貧、質素をモットーに独自の教会を造って信者を集めていた。大都市になると城壁の内と外の教会の比率は半々にも及ぶほどの都市も存在した。そしてこの城壁外の異端の多くには人間と自然の融合を基本とする汎神論を内に含む神秘思想の影響がみられる。また、1738年、ローマ教皇庁から異端の宣告を受けたフリーメーソンは、単に自由、平等、博愛、人道尊重、諸宗派への寛容、理想社会の実現という世界主義的な要素だけを掲げたのではない。同時に、この結社は「創世記」に見られるようなタテ系列の神－人間－動植物というヒエラルヒーではなく、これら相互の対等・水平的価値観をもっていた。

こうした(1)、(2)の世界観はある日突然出現したわけではない。ヨーロッパ思想の源流には、神々－人間－自然が一体となった、汎神論的なギリシア神話の世界観がある。人間にも自然万物にも霊を考える。とすれば、霊によって人間も自然万物もつながっている。「霊」、「精霊」、「たま」で表現される共通の観念はヨーロッパだけではなく、人類の普遍的な観念である。自然も人間も霊的なものによって息づいているとするアニミズムには、自然万物への崇拝すら存在する。例えば「動物崇拝」「植物崇拝」「鉱物崇拝」「岩石崇拝」「天然崇拝」等である。オールタナティブ運動には、こうしたギリシアの昔に人々が抱いていた自然観を共有するグループも存在する。今までみてきたように、「西洋思想＝自然支配」説は①差異性をもった西洋を一元等質視していると同時に②これと対をなして提出される「東洋思想＝自然との調和」説は、現代の自然環境の汚染と破壊を説明できない。更には史上、東洋諸国間の戦争と殺戮をも解釈できない。またこの説は、③人間と自然との連続性、水平化を中心の原理にもつ汎神論や、動植物との共生を説く人々をも一括して西欧思想とする無理をおかしている。

ところで人間に自然支配を意識的に可能にさせたのはたかだか16世紀以来である。近世自然科学の発達を背景に、デカルト哲学が、「精神」と「肉体」を分離して以来、中世的世界観はくずれ始めた。自然万物に霊的なものを認め、自然は霊的なものの力によっても動かされるという世界観に立ちむかったデカルトは、自然万物から霊的なものをとり去り、自然界を機械的な体系として、神でも、霊でもない力学の支配する世界と見なした。一方霊的なものは人間にのみ備わるものとした。自然は脱靈魂化され、自然科学の力で平等に支配される量的存在とされた。自然が神や霊の力によらず、科学としての、それ自身の因果法則に従っていると見なすからこそ、人間はこの法則を利用し、自然を支配することが可能になる。まさにベーコンの言う「知は力なり」に基いて、人間による自然支配は急速に度を深めた。デカルトの自然の脱靈魂化、物心分離の思想それ自身が近世の自然科学の発達から生まれた。そしてこの生まれた思想が、更に自然科学と技術の発達を促していった。

「自然の支配」の直接的推進力は歴史貫通的には自然科学の発達であり、個別歴史的にはこ

れを利用した16世紀以降の工業文明である。こうした文明化を思想が支えたとしてもそれは「西洋思想」で一括同質化できる思想ではない。神秘主義、汎神論はデカルト以前も以降も姿、形を変えて西洋思想の中に出現している。

万物の内在的原理を神に求め、神即自然を説いたスピノザの汎神論は、1656年ユダヤ教団から無神論の烙印を押された。だが、その汎神論の系譜は、レッシング、ヘルダー、ゲーテ、ハイネらにうけつがれている。自然が、デカルト流の人間にとっての単なる客観の対象ではなく、「生産的活力とその生きいきとした形態形成¹¹⁴」をもち、「根源的に生産的」であると把えたのはゲーテであり、ルドルフ・シュタイナーの人智学である。「世界霊」¹¹⁵において、ゲーテは次のように言う。さて万物は神のごとく大胆に／自らを越えて成り出でる。／水さえ、実りなき水さえ、青ずみ、ちりぢりの塵もまた活く。

次に、(3)キリスト教外では、キリスト教を人間と自然を切り離す思想と判断したルートヴィヒ・アンドレアス・フォイエルバッハは原始宗教を評価した。その理由は、原始宗教の中に人間と自然との結びつきを見たからである。人間自身が自然万物の一員であるとするフォイエルバッハにつづいて、カール・マルクスは、なるほど、「自然に働きかけてそれを変化させる」¹¹⁶人間の自然「支配」を説いたが、しかし無前提ではなく、人間自身も一つの「自然力」¹¹⁷であることを指定とした上での対自然観であった。自然と人間の相互作用、すなわち人間が自然への働きかけによって、同時に自分の自然を変えていく、とするマルクスの視座は少なくとも働きかけるべき自然が健全であることを前提とする。

マルクスをも含めて西洋思想として一括し、これすなわち自然支配であると断罪する比較文化論のイデオログたちの所説は、結局のところ、東洋か西洋か、のあれかこれかをのみ論じ、その共通性を論理化しない。そもそも「西洋」なる諸思想をたった一語で「戦闘性」と断定するところに無理がある。同時に日本を、「甘え」「タテ」「柔構造」などとわずか一語で定義することも論理の粗雑性を増すであろう。

オールタナティヴ運動は、西洋思想にも東洋思想にも共通に見られる人間と自然との有機的連関、共生、人間と人間との共生をめざしている。例えば、古代の原始宗教の中に人間の共同性を見だし、自然との調和を模索するグループ。生態系を宇宙次元にまで拡大し、人間とこれとの一体化を理論化するR. シュタイナーのグループ。核による人間と全自然系への破壊を生活基盤で喰いとめ、新たに共生を創りだそうとするグループ。自然を抑圧しない生き方が、オールタナティヴ運動の共通項である。

(3) 非暴力 オールタナティヴ運動の非暴力性は第一に、可視的・物理的暴力への対案であると共に、第二に不可視の暴力性への対案でもある。前者は反核運動に象徴されるように、軍事的手段を用いた平和と安全の保障に反対する非暴力不服従運動に貫徹されている。運動は、こうした核、通常双方の兵器体系という見える暴力と、同時に、人間を抑圧する一切の官僚機構、支配・統治機構、更には外国人、障害者、女性への差別という、即可視的にはならないが、厳然として存在する暴力への対案実現をめざしている。前者も後者も社会の徹底した民主化と不可分である。

(4) 脱産業社会化 産業社会のもつ価値観への対案として運動は多様な試行を展開している。既成文壇がもつ創作の私的作業性への対案として1970年に発足した労働者文学動体「作業集団・労働世界の文学」。ここでは文学の市場化・商品化に抗して、生産—媒介—受容を視野に入れ

つつ、共同制作を試みている。異った体験をもった労働者と知識人・学生が共同作業によって、商品化されなければ受容者の手に届かない現実への対案として、受容者との直接コミュニケーションをもつ朗読会が重視されている。価値合理性を自由時間におき、上役のいない企業作りが全国各地に広がっている。こうしたオールタナティブ企業は共同経営、自主管理が原則である。シュタイナー学校に見られるように、規格化されない学校、点取り競争に追われない学校もオールタナティブな運動の一環である。

(5) フェミズム 70年代のフェミズム運動の世界的潮流は西独にも大きな影響を与えた。階級一元論に陥ってしまう伝統的社会主義婦人論に代って、男性—女性間の構造にもメスを入れ、家父長制をも同時に崩していく運動が展開されている。女性の夜間の社会的・文化的・政治的生活を行いやすくする目的をもった、女性用夜間割引タクシーを実現させるグループ。女性の自己決定権の拡大を視野に入れ、刑法218条を撤廃させる運動。すべての分野で男女同数化を目標にするグループ。夫、父親からの急増する虐待と暴行からのがれると同時に、抑圧の構造を自ら学んでいく場＝女性の家の設立を求めるグループ。学校の成績は全国平均すると女子の方がいいにもかかわらず、職業教育の場が男子よりも少ない現実を変えていこうとするグループ。人間との共生を、男子間のみではなく、真に男女において実現させることをめざす運動は、既成の性差による分業のパラダイムをこわしていく。

以下では、これまで述べてきたオールタナティブ運動関係の年表を作成する。私は、作成にあたって次のような困難につきあたらざるをえない。第一に、既述したように、もともとこの運動が巨大な組織や世間周知の運動形態をとらず、分権的、分散的、反ヒエラルヒー的であり、国家的視野をもった統一運動ではなく、地域を場として各地が自立した集合体をもつので、その各々の始まりと終わりが見えにくい。運動の実体がなくても、組織だけを残すというような組織維持を自己目的化することはせず、既成マスメディアがとらええない、外縁部で運動が展開されることも多いため、主として既成マスメディアに頼らざるをえない私にとって、情報の獲得の限界につきあたらざるをえない。第二に、私の力量がかべとなっている。すべての分野に精通することはできないので、私の視野と関心からは、ザルからもれ出るような部分が多い。この二点は、この拙稿の限界を成している。そして、これは、「私の研究」という研究の個性に大部分を負っていると思う。この場をかりて、広く、共同研究をよびかけたいと思います。

関 連 年 表

西 ド イ ツ	その他の国々
1970	
3.19 エアフルトにて第一回両独首脳会談	
3 労働者文学運動体「作業集団・労働世界の文学」発足	3 英国下院男女同一労働同一賃金の原則を規定した賃金平等案を可決
	3 米下院、男女完全平等を内容とする憲法改正案を可決
	4.16 米ソ戦略兵器制限交渉SALT、ウィーンで開催
	4.22 アメリカ全土で「アース・デー」、反戦からエコロジーへの関心移行開始
5 「作業集団・労働世界の文学」の機関誌『情報』創刊	

- 6 「作業集団・労働世界の文学」第一回全国代議員大会、「芸術としての文学」ではなく「現実としての文学」(ギュンター・ヴァルラフ)
 - 8.12 ブラント西独首相とコスイギンソ連首相により西独・ソ連条約の調印
 - 12.7 西独・ポーランド両首相間で「関係正常化の基礎に関する条約」に調印

1971

 - 9 米英仏ソによる「ベルリン四大国協定」仮調印(72.6.3本調印)
 - 8.26 米・NOWによる女性解放のための全国スト
 - 9.5 椿新瀉大教授, スモンの原因に, キノホルム関係ありと発表
 - 11 スナップ(ポロニウム210, 出力500W)を積んで月にむかった米アポロ13号, 故障で大気圏再突入, 放射能電池, トンガ付近の海中に放置
 - 12.14 ポーランド, 食糧, 生活品値上に反対する暴動発生, 各地に波及
 - 2 米, 男女平等をうたう憲法修正, 上院可決
 - 4 イタリア共産党内にイル・マニフェストグループ成立, ユーロコミュニズム路線発展
 - 5.9 EC, 西独マルクの変動為替相場制採用認める
 - 6.30 神通川流域のイタイイタイ病第一次訴訟判決公判にて, 富山地裁「カドミウムが主因」と判決
 - 8 スイスに婦人参政権
 - 9.29 阿賀野川水銀中毒訴訟にて新潟地裁, 原告に勝訴判決
 - 10.25 国連総会, 逆重要事項指定決議案を否決し「中国招請, 台湾追放」提案可決
 - 12.18 10ヶ国蔵相会議, 金1オンス=38ドルで合意(スミソニアン体制)

1972

 - 1.28 職業禁止令
 - 3.22 米・男女の差別を禁じる憲法修正第27条(ERA)上院通過
 - 4.10 生物兵器禁止条約47ヶ国調印
 - 6.5 初の国連人間環境会議, スtockホルムで開会
 - 7.24 四日市公害訴訟で津地裁, 6社に8,800万円の支払を命ずる
 - 8.16 森永ヒ素ミルク事件で森永乳業の責任を認め, 未確認児にも救済補償を認める

9 ブラント首相, 連邦議会解散

11. 8 東ドイツとの間に「基本条約」まとまる

11. 9 連邦議会選挙

1973

6.15 西独, 国連への加盟申請

6 フィッシャー文庫, 作業集団叢書を刊行

12.11 ブラント首相とシュトロガルチェコ首相
国交正常化条約に調印 (ブラハ)

1974

2 「作業集団・労働世界の文学」準備員も含め
270名に増大, 35の作業場4. 5 連邦参議院, 東独との常駐外交施設交換法
案を可決4.29 ギョームスパイ事件, 東独との外交使節交
換を無期凍結5. 6 ブラント首相, 個人秘書のスパイ事件で引
責辞任9.12 ワルシャワ条約機構軍, 5ヶ国が10万人,
チェコ領内で大規模演習

9.14 NATO軍, 北大西洋全域大演習

9.29 日本・中国, 日中共同声明に調印, 外交関
係樹立

1.27 ベトナム和平パリ協定調印

3.11 EC閣僚蔵相会議開催, マルク3%切り上
げ

3.29 南ベトナム, 米軍撤退完了

6.20 米ソ首脳会談継続, SALT IIの基本原則
に調印8. 4 米連邦最高裁ダグラス判事, カンボジア爆
撃即事停止要請の提案を認め, 政府に爆撃
中止命令8.31 ソ連自由派知識人ヤキール, クラシン兩人
に3年の禁固刑の求刑9.11 チリで軍事クーデター, アジェンデ人民連
合政権崩壊。この事件をきっかけに伊共産
党は「歴史的妥協」にむかう。

9.13 第28回国連総会, 東西両独の加盟承認

12.28 パリにて「収容所列島」(ソルジェニーツィ
ン) 公刊。

1. 3 欧州通貨暴落

1.26 ベ平連解散集会 (東京)「危機の中での出直
し」2 ユーゴで新憲法公布, 自主管理社会制度の
発展2.11 エストニアのドイツ系市民, モスクワにて
西独移住拒否の抗議デモ2.13 ソルジェニーツィン, 市民権剥奪, ソ連よ
り国外追放, 西独入り

5.16 連邦議会にてヘルムート・シュミット社民
党副党首を首相に選出

9.19 西独・フィンランド国交正常化

1975

- 2 ヴュールの原発建設予定地の占拠, 仏, スイス国境の人々と共に。局地的, バラバラだった市民運動が全国規模のエコロジー運動に成長
- 3 連邦憲法裁判所は「現行の年金制度上の男女の異なる取扱いが違憲である」として年金に関する男女平等化判決

1976

- 1 ネットワーク, 西ベルリンに誕生, オールタナティヴ運動の財政的基盤を担う
- 6 刑法第218条発効

5.18 インド地下核実験

6.17 仏ムルロア環礁で核実験, オーストラリア, ニュージーランド抗議

6.18 NATOの閣僚理事会開催, 「大西洋宣言」に調印

7.20 トルコ軍6,000人, 陸海空からキプロスに上陸, ギリシア全土に総動員令

8.4 日本のプロテスタント・カトリック両キリスト教界合同による日韓キリスト者合同会議発足

8.8 ニクソン大統領, ウォーターゲートもみ消し事件で辞任

10.20 スイス国民投票, 外国人労働者締めだしの憲法改正否決, 女性初投票

12.14 国連総会, 「侵略の定義」を表決ぬきの総意で採決

1 仏で妊娠中絶自由化法案成立

2.26 トルコ, NATO演習参加拒否通告

4.30 ベトナム解放軍サイゴン解放

6.19~7.2 メキシコで国際婦人年世界会議, 参加133ヶ国, 41団体

9.4 東海村核燃料再処理工場のウラン試験始まる。以降汚染事故続出

12 英, 男女平等賃金法, 性差別禁止法施行

2.4 米上院外交委員会多国籍企業小委員会でロッキード事件発覚

4.5 北京にて天安門事件

4.25 ポルトガルに社会党政権誕生

8.6~7 ペートラ・ケリー日本講演旅行

- 11 ブロクドルフ原発反対デモ。運動が世界の注目を集めはじめる
- 12 ブロクドルフの原発，行政裁判所により「建設の一時停止」判決。
- 12 「緑のリスト・環境保護」，ハーメルン市とヒルデスハイム市に初めて立候補
- 12 ペートラ・ケリー，ヴュールの南のザスバッハの市民大学「ヴュールの森」に招かれる

1977

- 2 ブロックドルフに3万人，イエッホー市に2万人が反原発集会
- 3 シュレスヴィヒ＝ホルシュタイン州のシュタインブルク郡会選挙にて「緑のリスト」初議席
- 3 ヴュール原発について，フライブルグの行政裁判所，着工差しとめ判決
- 3 グローンデ反原発闘争，市民層から拒否される
- 3 社民党青年部の青年社会主義者同盟JUSO新委員長に最左派（「シュタモカップ」）クラウス・ウベ・ベネッタを選出
- 4.27 社民党K・ベネッタの党員活動停止処分
- 5 ニーダーザクセン環境党結成
- 8.22 『シュピーゲル』誌8月22日号にルドルフ・バーロ論文「党と官僚」（後に論文もふくめてDie Alternative, Europäische Verlagsanstaltとして出版）が掲載される。
R. バーロは東独政府に直ちに逮捕
- 9.5 シュライヤー事件
- 9.17～19 社民党連邦党規約委員会，クラウス・ウベ・ベネッタを除名
- 10 ヒルデスハイム郡議会選挙「環境保護・緑のリスト」1.2%
- 10.18 シュタムハイム刑務所（シュトゥットガルト）にて赤軍派三人が「集団自殺」
- 11 シュミット首相，NATOの軍備増強を要求

9.9 毛沢東死

10.12 中国四人組事件

- 11.4 『11月4日号ニューサイエンティスト』にて，ジョーレス・メドヴェージェフ，初めて「ウラルの核惨事」にふれる
- 12.15 OPEC総会（ドーハ）原油の二重価格決定

1 チェコ自由派知識人ら「憲章77」発表

- 7.28 核問題7ヶ国協議グループ，国際核燃料サイクル評価計画をスタート
- 8.22 ルドルフ・バーロ，東独にて逮捕（一年後，8年の自由刊）
- 8.29 国連砂漠化防止会議（ナイロビ）

11 社民党大会, 原発継続を決定

1978

- 1 西ベルリンにおける虐待された「女性のための避難所「女性の家」1年間の活動報告, 650人がかけこむ
- 3 シュレースヴィッヒ=ホルシュタイン郡にて「緑のリスト」6.7%, 3議席。ブロックドルフ原発のあるヴィルスター町で17%
- 5 NATO諸国首脳会議にて核近代化計画決定(79.12.に具体化)
- 6.4 ニーダーザクセン州議会選「緑のリスト環境保護」3.9%。ハンブルグ市議選「多色のリスト」BL3.5%, 「緑のリスト・環境保護」1%。共に州レベルの選挙に初参加
- 6.18 ブルンスビュッテル原発で3時間にわたって数トンの放射性蒸気をふきだす。この事故で、西独の12基のうち9基が事故でストップ
- 7 ヘルベルト・グルール, キリスト教社会同盟を離党し, ①エコロジーの擁護②現代機構の簡素化をかかげて「緑の行動・未来」(GAZ)を創設
- 7.16 ボンで先進国首脳会議, 世界不況脱出で共同宣言を採択
- 10 ヘッセン州議会選, 「緑のリスト・ヘッセン」1.1%, 「緑の行動・未来」0.9%。バイエルン州議会選, 「緑の人々」1.8%
- 10 西ベルリンに「民主主義と環境を守るオールタナティヴ・リスト」AL結成される
- 11 ボン近郊のトロワドルフにて緑をめざす全国の組織代表者会議。ヘルベルト・グルール(GAZ), ハオスライター(AUD), ミラン・ホラチュク(77年憲章), ルーカス・ベックマン(人智学), ペートラ・ケリー, ノーベルト・マン, ヨーゼフ・ボイス(FIU), ディーター・ブルクマン, ローラント・フォークト(BBU) 他SPD党员
- 12~79.1 IGメタル鉄鋼産業部門, 新行動計画に基づいて週35時間労働の要求を掲げて44日間の長期スト
- 12 79年6月の欧州議会選を視野にいて緑をめざす各団体代表者会議
- 1.24 ソ連原子炉衛星コスモス954号カナダ上空にて分解炎上。3月2日には200レントゲン/時の放射線を出しつつける破片発見
- 3.12 仏総選挙第一回投票, 左翼48.4%, 与党46.5%
- 4.25 伊方原発訴訟, 国側勝訴
- 5.23~6.3 初の世界軍縮会議「軍縮に関する国連特別総会」149ヶ国政府代表参加
- 5.27 サンフランシスコ, ニューヨークにて国際軍縮駅伝

- 12 西ベルリンAL, 選挙綱領作成。院外運動の結集体。エコロジーを中心課題とせず

1979

- | | |
|--|---|
| <p>1 シュミット首相, グアドループの米英仏独4ヶ国首脳会談でNATOの米新型ミサイル配備を要請</p> <p>1 ユダヤ人大虐殺を描いた「ホロコースト」全国放映, ホロコースト現象おこる</p> <p>3.17~18 諸組織代表500人で「その他の政治結社一緑の人々」SPV=Die Grünen 結成される(ズィンデルフィンゲン)。ハンブルグBL, 西ベルリンALはオブザーバー参加。欧州議会選にペートラ・ケリー, ローラント・フォークト, デルダ・デーゲンを決定</p> <p>3 西ベルリン市議選AL5%超えられず</p> <p>3 ラインラント=プファルツ州議会選, 緑の人々立候補できず</p> <p>3.31 西独最大の反原子力集会, ゴアーレーベン=ハノーファー間に10万人デモ</p> <p>4.1 オールタナティヴ日刊紙, taz 創刊。ドゥチュケ, サルトル支援する</p> <p>5 西ベルリン市議選, AL3.7%</p> <p>5.8 ブレーメン市議選, 「緑のリスト」2%</p> <p>6 欧州議会選挙, 「緑の人々」結成後初の全国規模の選挙, 3.2%(100万票)。伊急進党130万票, 仏ヨーロッパエコロジー党4.4%</p> <p>9 バーデン=ヴェルテンベルク州緑の党誕生 600人参加</p> <p>10.7 ブレーメン市議選, 「ブレーメン緑のリスト」5.14%, 4議席, AL, 1.3%。州レベルで初議席。連邦緑の党結成にむけて加速</p> <p>10 ボンにて原発反対集会, 西独史上最大の120団体, 10万人参加</p> <p>10.17 ルドルフ・バーロ, 獄中生活2年余りの後に東独から西独へ放逐</p> <p>10.23 「リシュカ訴訟」</p> <p>11 「緑の人々」全国組織結成準備会議(オッフエンバッハ), 欧州議会選挙が好成績ゆえに様々な組織結集する</p> | <p>1.1 米中外交関係樹立</p> <p>2 イラン革命</p> <p>3.28 米ペンシルベニア州スリーマイル島原発で空前の事故</p> <p>5.4 英総選挙, 保守党勝利, サッチャー首相になる</p> <p>6.18 米ソSALT IIに調印</p> <p>9.23 ニューヨークにて反原発集会, 20万人</p> <p>9.18 第34国連総会, 婦人に対するあらゆる形態の差別撤廃条約を採択(80年7月17日, 日本含め51ヶ国署名)</p> |
|--|---|

- | | |
|---|---|
| <p>12.12 NATO理事会, 三重決議。西独にはパーシング II 108基, 巡航ミサイル96基配備計画</p> <p>12.24 ドゥチュケ死</p> <p>1980</p> <p>1.12~13 緑の党創立大会(カールスルーエ)。二重党籍548対414で否決。党結成90%の賛成で決定。綱領, 役員人事決まらず</p> <p>1 第12戦車師団長バステアン司令官, 中距離核配備に反対し, 師団長解任される</p> <p>2 ロルフ・ホーホフートの『法曹一家』出版される</p> <p>3.16 バーデン=ヴュルテンベルグ州議会選, 緑の党5.3%で州レベルで第二番目の州議会入り</p> <p>3 ロイトリンゲン自転車推進運動グループ, 市の自転車道需要計画への対案として独自の計画案提出。「旧市街環状線」が中心の考え</p> <p>3.21~23 緑の党連邦代表者会議(ザールブリッケン), 綱領前文に四原則(底辺民主主義, 社会性, エコロジー, 非暴力)。初代代表にP. ケリー, ハオスライター, N. マン。
左派提案〔賃金同一のまま週35時間労働〕が穏健派〔賃金を減らし, 35時間労働〕を賛成多数で破り, 可決。フェミニスト対保守派の対立顕著に</p> <p>4 ザールラント州議選, 緑の党2.9%</p> <p>5 ノルトライン=ヴェストファーレン州議選, 緑の党3.0%</p> <p>5.3 「ヴェントラント自由共和国」が「独立」, ゴアレーベン再処理工場建設予定地に「反原発村」作られ, テント数110, 常駐者300人で, 予定地占拠</p> <p>6 緑の党大会(ドルトムント), 後任にグルールとディーター・ブルクマンが争い, ブルクマン勝つ。グルールにとって, 敗北は脱党への契機となる。</p> <p>6 ギュンター・グラス, 『頭脳の出産』上梓</p> | <p>12 米上院SALT II 否決</p> <p>12.27 ソ連, アフガニスタンへ軍事介入</p> <p>4.15 仏・ラ・アーグ核燃料公社の再処理工場で火災事故</p> <p>5 非核太平洋会議にて非核太平洋宣言と独立を求める非核太平洋人民憲章</p> <p>6.20 スウェーデン議会, 2010年まで原発操業完全停止決議</p> <p>7 米大統領, 指令59号にて, 限定核戦争の可能性示唆</p> <p>7.1 ポーランドで食肉値上抗議スト始まり, 全土に波及</p> |
|---|---|

- 9 ペンクラブ、大衆の煽動と世論操作を行うシュプリングァーコンツェルンに対して執筆拒否を決議
- 9 ゲッチングェン市に女性の家つくられる
- 10.19 ボンにて5千人集会、精神患者、元患者、関係者ら出席
- 10 連邦議会選挙、緑の党、国政レベルの選挙に初参加1.5%
- 11 贖の印・行動／平和奉仕ASF、第一回平和週間、西独各地で開催
- 11.15～16 クレーフェルトにて反核シンポジウム、クレーフェルト宣言だされる。8人の発起人はプロテスタント神学者マルティン・ニーメラー、元国防軍司令官バスティアン、緑の党代表P. ケリー、元社民党連邦議員カルル・ベッヒェルト、自民党幹部会員クリストフ・シュトレッサー、ドイツ平和連盟からヘルムート・リダーとヨーゼフ・ザーバー、それにゲスタ・フォン・ウェッキル。以降宣言への署名運動全西独に広がる
- 11.26 ミヒャエル・エンデ、ドイツ児童文学アカデミー賞受賞記念講演
- 1981
- 2.2 ハンブルグ市社民党、党中央の方針に反してブロックドルフ原発建設反対決議
- 2.28 ブロックドルフ原発建設の再開に反対して5万人がデモ
- 3 統一地方選、ヘッセン州フォルクスマルゼン（核燃料再処理工場建設予定地）にて、緑の党41.6%、後、建設不可能に
- 4 クレーフェルト宣言署名30万人
- 4.4 ボンにて、米核ミサイル配備に抗議して25万人デモ
- 4 西ベルリン、空家占拠闘争支援に3万人デモ
- 7.2 「太平洋への核廃棄物投棄に反対するマリアナ同盟」代表が科学技術庁に投棄計画抗議
- 8.14 ポーランド、造船スト
- 8.17 ポーランド、統一スト委結成、政府に16項目要求
- 9.15 米、ノースダコタ州、グラウンドフォークス空軍基地で、核兵器搭載のB52戦略爆撃機が炎上
- 9.20 米、アーカンソー州、ダマスカス近郊IC-BM地下貯蔵庫で、ロケット推進燃料の爆発事故
- 9.22 ポーランド「連帯」創設、委員長にワレサ
- 10.26 英、ロンドンにてCND（核軍縮運動）等の主催で10万人の反核集会
- 11.4 米大統領にレーガン当選
- 4 米原潜、日本の貨物船「日昇丸」に衝突、原潜一部破損

- | | |
|---|---|
| <p>5 西ベルリン市議選, オールタナティヴ・リストAL('85.6に緑の党に合流)7.2%。キリスト教民主同盟47.9%戦後最高票。市長候補にヴァイツゼッカー現大統領。緑の党, クロイツベルク区議会で15.8%</p> <p>5.14 クレーフェルト宣言署名80万人をこす</p> <p>6.21~26 ハンブルクにてドイツ福音教会全国大会。ASFによるアピール。平和運動のフォーラムとなる</p> <p>8 西ベルリン, 住宅占拠件数170</p> <p>8.20 西独作家150名, 反核アピール</p> <p>9.5 シュトウッケンブロックにて反核5千人集会, 国防軍兵士も参加</p> <p>9 核戦争の危機を警告する医師の会議</p> <p>10 緑の党, オッフエンバッハにて党大会。三人の代表にP. ケリー, ディーター・ブルクマン(共に再選), マレン・グリースバッハを選出</p> <p>10.10 ボンにてASF主催の平和集会。20数万人参加, 西独史上空前の人数。シュミット首相の発言「ソ連を利する」にもかかわらず社民党連邦議員20人参加</p> <p>10 西独最大の青年団体(500万人)「ドイツ連邦青年評議会」DBJRが各州代表者会議を開き, 反核にて一致</p> <p>11 ヘッセン州, 空港団結小屋撤去</p> <p>1982</p> <p>3 Stattwerke(代わりの事業所)オールタナティヴの銀行開設</p> <p>3 国勢調査, 超党派で連邦議会にて議決</p> <p>3.21 ニーダーザクセン州議選, 緑の党6.5%(+2.6%)で11議席</p> <p>3 シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州議選に「キール外国人制限党」加わる</p> <p>3 グルール, 「エコロジー民主党」を結成</p> | <p>5.10 仏にミッテラン政権。続いて南欧ギリシア・スペインにも社会主義政権</p> <p>6.14 スイス政府提出の男女平等提案を国民投票</p> <p>8.6 米レーガン政権, ヒロシマ・デーに, 使える核兵器中性子爆弾製造決定</p> <p>8.6~9 パリにて欧州初のヒロシマ・ナガサキデー</p> <p>9.10 ポーランド連帯第一回全国大会, 7項目宣言採択</p> <p>11.17~18 東ベルリンにて東西ドイツ作家会議</p> <p>11.18 レーガン大統領, ゼロオプション発表</p> <p>12.13~14 東西ドイツ作家対話集会(東ベルリン)</p> <p>2.13 ドレスデン平和集会, 東独でも正しい対応があれば核戦争に生きのびることが可能, との政府に抗議</p> |
|---|---|

- 3.31 スリーマイル島原発事故後3年, ゴアレーベン再処理工場建設反対デモ10万人
- 4.9~12 復活祭大行進, 1961年来20年ぶりに行われる。国連軍縮総会へ向けて欧米各地で軍拡に大抗議行動
- 4 ハンブルグに乳児と学童保育所を兼ねた「子供の日中の家」オープン
- 6 ドイツ福音教会の全国大会。これまでに最大規模の12万人のデモ
- 6.6 ハンブルグ市議会選, 「オールタナティヴリスト」ALと「緑のリスト」GLUは連合し, GALとして参加。7.7%の得票
- 6.12 ニューヨーク反核大集会。米国史上最大100万人参加
- 6.18~25 国際文学会議(ケルン), 東西ドイツの作家たちの協力で開催。「あらゆる大量殺戮兵器の完全な廃棄, 平和で人間的な状態を地球上のいたるところに作りだす」決議
- 7 イザール原発に, 国内では5年ぶりに建設許可
- 9.17 ゲンシャー外相ら自民党4閣僚辞任
- 9.26 ヘッセン州議会選, 緑の党8%(+6%)。大都市, 空港建設地域で伸長
- 10.1 連邦議会, ヘルムート・シュミット首相の交代を求めた「建設的不信任案」を賛成多数で可決。後継首相にキ・民主党のヘルムート・コール党首を選出
- 10.9~10 ビーレフェルトにて「労働の将来についての会議」
- 10.10 バイエرن州議会選, 緑の党4.6%(+2.8%)で5%のハードル超えられず
- 10.10 アウシュヴィッツで死刑囚の身代わりになって殺されたコルベ神父の列聖式(バチカン)
- 11.12~14 緑の党連邦代表者大会(ハーゲン), 138項目のうち女性問題に一度だけしかふれず, 性分業を問題にしていない綱領提案に女性たち抗議
- 11 民主社会党結成
- 11.30 バーデン=ヴュルテンベルク州新条例成立「暴力デモの場合, 出動した警官の費用はデモ隊が払う」
- 12.12 NATO二重決議3周年, 各地で抗議行動
- 12.19 ハンブルク出直し選, GAL(緑の党+オールタナティブ・リスト)6.8%(-0.9%)
- 1983
- 1.15~16 ズィンデルフィンゲンにて緑の党連邦代表者大会。経済政策合意, 資本主義も現
- 1.14 ポーランド, ワレサ連帯委員長, 職場復帰拒否される

- 実に存在する社会主義も破綻との認識で、自主管理企業を主張。労働の再配分，エコロジーに基づく投資を表記。緑の原理派（R. バーロ）と左派（R. トランペルト）との合同案
- 1 ヘッセン州緑の党連邦議会議員候補指名に女性一人も選ばれず
 - 2.18～20 緑の党主催「東西の先制攻撃用兵器と大量殺戮兵器に反対する国際法廷」(ニュルンベルク) 開かれる
 - 2.26 妊娠中絶の自由化を，9000人の女性要求（カールスルーエ）
 - 3.6 連邦議会選，緑の党5.6%（+4.1%）27名の議員（男性17名）で連邦議会初進出。女性議員の割合最も多い
 - 3.9 リューネブルク駐屯の国防軍野戦砲部隊第三中隊が非核宣言
 - 3 ダルムシュタット，カッセル，ニュルンベルク，リンダウ等11都市にて非核宣言
 - 4.13 連邦憲法裁判所，国勢調査の執行停止仮処分。「国勢調査ボイコット連絡会議」VO-BOの全国的運動，「政治家は問う，市民は答えない」をスローガンに行動開始
 - 4.22 『シュテルン誌』アドルフ・ヒトラーの「秘密の日記」の連載
 - 4.27 国勢調査実施予定日，政府調査断念
 - 5 ヘッセン州緑の党，州議会に州職員代表法提出，州の公共機関で共同決定の拡大をめざす
 - 5 欧州核軍縮運動END，第二回欧州軍縮会議（西ベルリン）。東西の核軍拡を非難，東側底辺平和運動を招待。会議終了後，緑の党連邦議員P. ケリー，G. バスティアン，アレキサンダー広場（東ベルリン）にて軍縮を訴え，逮捕される
 - 5 人智学グループによるヴァルドルフ大学設立が認可される。理事長コンラート・シリ－。西独初の私立大学。
 - 6 ハノーファーにて緑の党臨時党大会。労組・社民左派との左翼共闘（R. トランペルト）と，社民労組との共闘ではなく，保守的国民との連合（R. バーロ）構想の路線論争
 - 3.5 オーストラリア総選挙，労働党政権成立
 - 3.6 イタリア共産党第16回大会，「歴史的妥協」をやめ社会党との連合をめざす「民主的選択」採択
 - 3.8 ブリュッセルにて国際婦人デーに25ヶ国，1万人参加
 - 5.23 モスクワ放送国外向け英語放送ニュース番組にてアナウンサー，アフガン侵攻を非難
 - 5.26 秋田沖でM.7.7の地震。原発論議に影響与える

- | | |
|---|---|
| <p>7.7 ツィーマーマン内相 (CSU) とエンゲルハルト法相 (FDP) デモ規制の強化</p> <p>7.18 『シュピーゲル』誌, 家庭内暴力について長大論文掲載</p> <p>7.20 政府, ガソリンを動力とする乗用車に対するアメリカの排ガス規制値を86年1月1日を目標に踏襲する決定 (後に撤回)</p> <p>8.3 ヘッセン州議会, 州内駐屯の米軍部隊司令官を招待。緑の党シュバルバホート議員の「血の軍服事件」</p> <p>8.9 緑の党, クラウス・ヘッカー連邦議員 (緑の党) に辞職勧告</p> <p>9.1 ハンブルグ, ボン, 西ベルリン, シュトゥットガルトにて計100万人の参加で, 核ミサイル配備反対の行動。シュトゥットガルトーノイウルム間100kmを10万人が人間の鎖</p> <p>9.25 ヘッセン州議会選, 緑の党5.9% (-2.1%)</p> <p>10.13~22 反ミサイル運動ー反核行動週間</p> <p>10.13 ブレーマーハーフェン米軍補給基地封鎖デモ6千人。250人逮捕</p> <p>10.22 シュトゥットガルトーノイウルム間世界一長い人間の鎖, 22万人。450人逮捕</p> <p>10 緑の党連邦議員, P. ケリー, O シリー, G. バスティアン, 東独議長に招かれる。東独国内の平和運動弾圧に抗議</p> <p>11.12 連邦議会, パーシングII, 巡航ミサイル配備を可決。与党連合, 連邦議会にて配備賛成</p> <p>11.29 持ち株会社フリック社の不正政治献金に絡む贈収賄事件を捜査中のボン地検は, ラムスドルフ経済相の起訴を決定</p> <p>12.1 外国人の帰国促進法発効, 30万人がドイツを去る</p> <p>12.28 国民投票/成熟した民主主義運動 (バーデン=ヴェルテンベルク州, アッハベルク) が, 「国民請願による国民投票を実施可能にするための連邦法」を要求</p> <p>1984</p> <p>1.16 レーゲンスブルク地裁, 建設中のイザール原発2号の工事停止を命ずる判決</p> | <p>8.21 フィリピン, ベニグノ・アキノ元上院議員暗殺される</p> <p>9.1 大韓航空機事件</p> <p>10.15~22 欧州反核行動週間, 戦後最大の大衆運動に。全欧で200万人参加</p> <p>11.10 イタリア・トレントの地方県議会へ「緑のリスト」初参加, 3%</p> <p>11.10 マルティン・ルター生誕5百年祭にローマ教皇パウロII世, 信書。ルターを評価。破門撤回にふれず</p> <p>12.8 フィレンツェにてイタリア「緑のリスト」全国総会</p> <p>12.30 原子炉搭載のソ連衛星コスモス1402が原子炉故障で落下</p> <p>1 フランス環境党創立</p> |
|---|---|

- | | |
|---|--|
| <p>2 クレーフェルト宣言の発起人グループより
P. ケリーとG. バスティアン脱退</p> <p>3 バーデン＝ヴュルテンベルク州議会選，緑
の党 8 % (+2.7%)</p> <p>3 緑の党内にフラクション，エコリベラル派
誕生</p> <p>4. 3 緑の党，議員団代表 3 人，議員団幹事長 3
人にすべて女性を選出。代表ヴァルトラオ
ト・ショッペ，アンティエ・フォルマー，
アンネマリー・ボルクマン，幹事長クリス
タ・ニッケルス，エーリカ・ヒッケルス・
ハイデマリー・ダン</p> <p>4. 5 『はてしない物語』封切り。一週間で200
万人の観客</p> <p>4.23 『シュピーゲル』誌，4月23日号より6週
にわたりR. シュタイナーの人智学の人々
について特集する</p> <p>5 西ベルリンのオールタナティブ・リストA
L，執行部に 8 人全員女性を選出</p> <p>5.22 連邦議会，第 6 代大統領にヴァイツゼッカ
ー氏を選出</p> <p>6 第二回欧州議会選，西独緑の党 8.2% (ベ
ルギー緑の党 8 %，オランダ，フランス，
ルクセンブルグでは 4～6 %)</p> <p>9 ノルトライン＝ヴェストファーレン州議会
選，緑の党 8.6%</p> <p>10.8～9 シュターデ原発からゴアレーベン貯蔵施
設へ210個の放射性廃棄物入りのドラム缶
輸送。反対派2000人，封鎖行動</p> <p>11 従来の身分証明書のコンピューターによる
読みとり化に反対の運動。政府，一時的断
念</p> <p>11. 3 西独政府によれば，東独政府は国境線上に
設置していた5.5万基の自動散弾銃発射装
置の撤去を完了。撤去は西独が東独へ十億
マルクの銀行借款供与に同意した見返り</p> <p>12.7～9 緑の党大会（ハンブルグ）。R，バーロ，
緑の党の既成政党化を批判。ヘッセン州の
連合をめぐり「社民との協力の是非を現時
点で決める必要なし」</p> | <p>1.18 三井石炭鉱業三池鉱業所の有田鉱で火災，
83人中毒死</p> <p>3.21 チームスピリット'84に参加の米空母が，
ソ連の原子力潜水艦と日本海南部で衝突</p> <p>3.28 旧土呂久鉱山ヒ素汚染で宮崎地裁は住友鉱
山に 5 億円の支払いを命じる</p> <p>5.14 国際ペン大会（東京），「核状況下における
文学」をテーマに開催</p> <p>8.27 「グリーンピース」と英全国海員組合が，
仏から日本へのプルトニウム移送阻止，と
発表</p> <p>9. 7 解放の神学のレオナルド・ボフ神父，ロー
マ法王庁で査問を受ける</p> <p>10.1～12 アジア・オセアニア地方セミナー，野
生動物国際取引に関するワシントン条約の
施行をテーマに開催</p> <p>11. 6 レーガン大統領再選</p> <p>12.10 ローマ法王庁，ニカラグア・サンディニス
タ政権の教育相カルディナル神父を「解放
の神学」ゆえに破門</p> |
|---|--|

1985

- 2.4 核燃料再処理会社DWK,「年間処理能力350トンの大型再処理工場をヴァッカーズドルフに建設」と発表
- 2.16 イザール原発抗議集会(シュバンドルフ), 緑の党, カトリック教会, ロベルト・ユング, 社民党, CSU有志らが参加, 3万人
- 2 ヨーゼフ・ボイスとミヒャエル・エンデ, 芸術と政治について自由国民大学で対談(アッハベルクとヴァンゲン)
- 3 オスカー・ラフォンテーヌ・ザールラント州首相, 緑の党に政権参加か対決かの二者択一を迫る
- 3 ザールラント州議会選, 緑の党2.5%, SPD単独政権。O. ラフォンテーヌとヨーゼフ・ライネン(社民党)の「反核コンビ」, ザールラント州の西独復帰以来初めてキリスト教民主党の牙城を破る
- 3 西ベルリン市議選, オールタナティヴリストAL, 10.6%(+3.4%)。社民党は32.4%(-5.9%)で戦後最低
- 5.12 ノルトライン=ヴェストファーレン州議選 緑の党4.6%
- 5 ヘッセン州首相(SPD), 緑の党に政権参加を要請, 新設の環境エネルギー省に大臣ポストの提供案。ヘッセン州緑の党は, 加えて女性問題省の新設と大臣ポストを逆提案
- 6.4 ミュンスター上級行政裁判所, アーハウスに建設中の使用済核燃料中間貯蔵施設の建設に一時中止命令
- 6.22~23 緑の党大会(ハーゲン)。西ベルリンのAL, 連邦緑の党への参加
- 6.30 ヘッセン州SPD特別党大会。総数233票中, 219票の賛成にて緑の党との連合決議
- 9 ヴォルフガング・アーベントロート死
- 10.20~21 緑の党女性大会にて218条削除を大多数で決定

12.19 「家庭科教育検討会議」, 高校家庭科の「女子だけ必修を改める」最終報告書提出

3 国立日本文化研究所(仮称)の設立に関する梅原私案を中曽根首相に提出

7 国連「国際婦人の十年」最終年, ナイロビ会議

7.10 ニュージーランドでグリーンピースの核実験抗議船, 爆破される

10 世界の気象学者29人がフィラック(オーストリア)にて炭酸ガス, フロンガス等の温

- 10.21 ギュンター・ヴァルラフ、『最低辺』を発行
86年3月までに200万部に達する
- 10.24 ヘッセン州議会, SPDと緑の党でベルナ
ー首相 (SPD) を選出。
- 10 ヘッセン州緑の党大会 (ノイイーゼンブル
ク), 党員4300名中1100名参加でSPDとの
連合政権に2/3の多数
- 12 バーデン＝ヴュルテンベルク州緑の党, 州
全党員にローテーションのアンケート。回
答率63%。議員任期 (4年) 途中のローテ
ーションに90%が反対
- 12.6 マインツ市にて女性用夜間割引タクシー案
が, SPDと緑の党の賛成により可決
- 12.11 ヴァッカーズドルフ核燃料再処理工場, 建
設工事始める
- 12.12 ヘッセン州にて西独史上初の州レベルでの
社民党SPDと緑の党の連合政権成立。緑
の党よりヨシュカ・フィッシャーが環境エ
ネルギー相, マリータ・ハイバッハが女性
問題担当次官に
- 12.13～15 緑の党大会 (オッフエンブルク)。
「直接民主主義宣言」の決議。党大会を中
断してヴァッカーズドルフ核燃料再処理工
場反対のデモへ。党代表の1人ユタ・ディ
ットフルトラ逮捕される

1986

- 1.7 ヴァッカーズドルフ再処理工場建設に反対
する運動にて500人逮捕される
- 1.12 緑の党創立者の一人社会彫刻家ヨーゼフ・
ボイス, 「緑の党は政治的展望をもってい
ない」と批判
- 1.23 ヨーゼフ・ボイス死
- 2 緑の党大会 (ハーゲン), 中断した党大会の
継続。金属労組幹部ハンス・ヤンセン演説
する
- 2 失業者数259.3万人 (10.4%)
- 3 米戦略防衛構想SDIの研究に, 民間企業
と研究機関参加の合意
- 4.29 ツィーマーマン内相, チェルノブイリは「2
千キロ離れているので危険なし」と発表
- 4.30 内務省管轄の気象台が「北東風がスカンジ
ナビアより吹きチェルノブイリ放射能雲は
心配なし」と発表

室ガス増加のため, 「気象の温暖化は不可避」
と警告

- 4.26 チェルノブイリ原発事故, 地球一帯に汚染
広がる

- 4.30 ミュンヘン、レーゲンスブルクにてそれぞれ2700ピコキュリー(100ベクレル),3848ピコキュリー(142ベクレル)を記録, 平常値の45倍, 政府公式発表は平常値の6~7倍
- 5.1 ツィーマーマン内相, 各気象台, 研究機関に対して「一般市民や報道機関に対して放射能測定値を公開してはならない」と指示
- 5.2 政府諮問機関の放射線防護委員会記者会見。牛乳1リットル中のヨウ素131の許容量を500ベクレルに引きあげる(現行許容量の140倍)
- 5.2 バイエルン州政府「4月30日の測定は平常の45倍に達していた」と発表
- 5.2 ヘッセン州社民-緑の党連立政府, (1)牛の放牧を控えるよう農家に勧告, (2)牛乳1リットル中のヨウ素131の許容量を20ベクレルに
- 5.3 ボンにて21年ぶりのライン河花火大会, 30万人, 夜11時開始。降雨。ボン大学放射線核物理研究所による調査, ヨウ素131, 132セシウム137, 134, ランタン140, ルテニウム103, テレル132の多量放射能を検出
- 5.5 西独政府, 東欧からの食糧輸入を全面停止
- 5.7 HKG社の黒鉛減速炉, フィルター故障による放射能放出事故。大気汚染はチェルノブイリによるもの, と責任転嫁して事故報告怠る
- 5.8 放射線防護委員会, 「飲料水の放射能汚染測定」をやめるよう勧告
- 5.8 ヘッセン州政府, 汚染農作物鋤き返しを指示
- 5.9 核廃棄物最終貯蔵庫ゴアレーベンに抗議行動
- 5.9 社民党, 中期見通しの中で, 原発の停止を発表
- 5.9 南バイエルン州の土壤汚染, ヨウ素131で5万ベクレル/㎡。西欧最大の汚染値
- 5.11 ミュンヘンにて市民に「正確, 十分な情報提供」を目標に『汚染通信』第1号発刊
- 6.15 ニーダーザクセン州議会選, 緑の党7.1%(+0.6%)
- 6 コール政権, 環境省を新設。名称を「環境保護・原発安全省」に
- 8 社民党大会(ニュルンベルク)。新綱領草案, 「原子力なしのエネルギー安定確保」。

ヨハネス・ラウ副党首を連邦首相候補に選出	
9.13～10.10 核ミサイル・パーシングⅡ配備基地ムートランゲン「封鎖の秋」。非暴力に基づく市民的不服従の展開。1500人逮捕される	
10 コール首相、アメリカ雑誌とのインタビューにてゴルバチョフソ連書記長をゲッベルス宣伝相と並べて論じる	
10.11 ハッセンバッハ米軍基地周辺にて巡航ミサイル96基の配備に反対して18万人が人間の鎖	10.11 レイキャビック会談
10 バイエルン州議会選、緑の党初議席	
11. 9 ハンブルグ市議選、緑の党GAL全員女性を立候補させ13議席、10.4%	11 イタリア、フィナレ・リグリにて全国「緑のリスト連合」第一回総会

註

- (1) 杉谷真佐子「オールタナティヴとしての労働者文学運動」『新日本文学』新日本文学会 p.145 1986 第11/12号 №468
- (2) 高田昭彦「草の根運動の現代的位相」『思想』岩波書店 p.176 1985.11 №737
- (3) 竹本洋二「西ドイツのオールタナティヴ運動」『技術と人間』技術と人間社 p.92 1982.3
- (4) ハンス・ヴェルナー・リュトケ、オラーフ・ディネ共編、荒川宗晴他4名共訳『西ドイツ緑の党とは何か』人智学出版社 p.374 1983
- (5) 高田昭彦「草の根運動の現代的位相」p.178
- (6) Kelly, Petra K.: Um Hoffnung kämpfen. Lamuv Taschenbuch 29 1983 S.18
- (7) Ebd. S.14
- (8) ハンス・ヴェルナー・リュトケ、オラーフ・ディネ共編、荒川宗晴他4名訳『西ドイツ緑の党とは何か』p.374
- (9) ルドルフ・バーロ、永井清彦、村山高康訳『社会主義の新たな展望』岩波現代選書、1980 原本はBahro, Rudolf: Die Alternative, Europäische Verlagsanstalt 1977
- (10) 高田昭彦「草の根運動の現代的位相」p.188
- (11) ハンス・ヴェルナー・リュトケ、オラーフ・ディネ共編、荒川他4名共訳『西ドイツ緑の党とは何か』p.355
- (12) リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー、永井清彦訳『荒れ野の40年』岩波ブックレット№55、岩波書店、1986
- (13) ピーター・シンガー、戸田清訳『動物の権利』技術と人間社、p.20、1986
- (14) 金子直一「活かすものと活かされるもの」ゲーテ年鑑第20巻、関西ゲーテ協会、p.238
- (15) 同上、p.224
- (16) マルクス、岡崎次郎訳『資本論』第1巻、第一分冊、大月書店、p.312、1982
- (17) 同上、p.312

参 考 文 献

① 和 書

(1) 単行本

- 1 小淵港「西ドイツにおける労働時間短縮運動」基礎経済科学研究所編『労働時間の経済学』青木書店 1987
- 2 伊藤光彦『ドイツとの対話』毎日新聞社 1986
- 3 近藤和子・福田誠之郎編「反核年表79-82」『ヨーロッパ反核79-82』野草社 1982
- 4 広田伊蘇夫、暉峻淑子編「序章 統計調査と人権」『調査と人権』現代書館 1987
- 7 遠藤マリア『ブロックを超える』亜紀書房 1983
- 8 永井清彦『緑の党』講談社 1983
- 9 ペーター・ブリュッケ著 子安美知子、クリストリープ・ヨープスト訳『シュタイナーの学校・銀行・病院・農場』学陽書房 1986
- 10 田代ヤネス和温『チェルノブイリの雲の下で』技術と人間社 1987
- 11 世相風俗観察編『現代風俗史年表』河出書房新社 1986
- 12 槇村久子『女たちのヨーロッパ』勁草書房 1984

(2) 雑 誌

- 1 「自然の逆襲が始まる」Newsweek 1987.3.5
- 2 安立清史・高橋徹(編)「社会運動論関連年表」『思想』岩波書店 1985.11 No.737
- 3 仲井斌「緑の党 — その実験と危機」『世界』岩波書店 1985.11月号より1986.7月号までの計8回連載
- 4 天笠啓祐, 編集部「西ドイツ・反管理国家のたたかい」『技術と人間』技術と人間社 1985.9月号
- 5 菊地悦朗編訳「郵便馬車のあったよき時代へ帰れ?」『第三の道』第5号 人智学出版社 1986. 第5号
- 6 尾鍋輝彦監修「整理年表」『中央公論』中央公論社 1983.3.4.5.7.8.9.11月号 1984. 6.8.11.12月号
- 7 石川裕一「空想と想像, および映画『はてしない物語』について」『第三の道』第3号, 人智学出版社 1985
- 8 マサコ・シェーンエック「西独のベストセラー」『世界』岩波書店 1986.7月号
- 9 ペーター・ブリュッケ著 子安美知子, クリストリープ・ヨープスト訳『シュタイナーの学校・銀行・病院・農場』学陽書房 1986
- 10 田代ヤネス和温『チェルノブイリの雲の下で』技術と人間社 1987
- 11 舟田正「イタリア通信(9)原発事故一周年の人間の鎖」『技術と人間』技術と人間社 1987.9月号
- 12 ルドルフ・バーロ, 山本知佳子訳「中へ, それとも外へ?」未発表論文
- 13 田村光彰「西ドイツの緑の党とフェミニズム」『技術と人間』1986.9月号
- 14 田村光彰「西独緑の党の議会外運動と直接民主主義」『技術と人間』1987.8月号

(3) 年鑑類

- 1 『朝日年鑑』朝日新聞社 1970年版~1975年版
- 2 『毎日年鑑1980年別冊 近現代史年表』毎日新聞社 1980
- 3 日本婦人団体連絡会編『婦人のあゆみ百年』大月書店 1978
- 4 日本文芸家協会編「海外文学の現況と翻訳・研究・ドイツ文学」『文芸年鑑』

② 洋 書

(1) 単行本

- 1 Sperr, Monika : Kindheit und Jugend. In : Petra Karin Kelly. Bertelsmann Verlag,

München 1983

- 2 K. Kelly, Petra : Um Hoffnung kämpfen. Lamuv Taschenbuch 29 1983

(2) 雑誌

- 1 Grüne Frauenkonferenz. In : Emma. Nr. 12. 1985
- Brauth, Marita : Nachttaxis für Frauen : Erfolg oder Falle? . In : Emma. Nr. 1.1986
- 2 Filter, Cornelia : Massenhaft stürmten die Bielefelderinnen die Nachttaxis für Frauen. In : Emma. Nr. 6 1986
- 3 Filter Cornelia : Grüne Karrieren. In : Emma. Nr. 4 1987
- 4 Grüne. In : Der Spiegel. Nr. 7 1987
- 5 Verena Krieger MdB. In : Prinz. März 1987

(3) 新聞

- 1 Feminismus heißt radikale Politik gegen Patriarchentum. In : Die Grünen. Nr. 44 1985
- 2 Nacht-Taxi für Frauen in Mainz. In : Die Grünen. Nr. 49 1985
- 3 Ro-Ro-Rotation. In : Die Grünen. Nr. 10 1986
- 4 Abgehärtet. In : Die Grünen. Nr. 31 1986
- 5 Degen, Gerda : Fünfzehn Jahre Kampf. In : Die Grünen. Nr. 32/33 1986
- 6 WAA-Genehmigungsverfahren. In : Die Grünen. Nr. 37 1986
- 7 Zum Weiterdenken, zum Weitermachen, zum Zukunftschöpfen. In : Die Grünen Nr.39 1986
- 8 Das Frauenstatut. In : Die Grünen. Nr. 41 1986
- 9 Schlimmste Befürchtungen werden wahr. In : Die Grünen. Nr. 18 1987
- 10 Siegfried Heim : Wenig überzeugend. In : Die Grünen Nr. 21 1987
- 11 Klaus Arnsperger : Con i liste verdi al parlamento. In : Die Grünen Nr. 22 1987

Versuch über die Alternativbewegung in der Bundesrepublik Deutschland

—Überblick und zusammenhängende Zeittafel

Mein Versuch über die westdeutsche Alternativbewegung kann in zwei Hauptteile eingeteilt werden: Überblick und Zeittafel. Innerhalb des ersten Hauptteils werden nach Inhalt und Form der Bewegung vier Themen unterschieden. Zunächst wird eine vorläufige Definition, was die Alternativbewegung überhaupt ist, versucht. Um ihren Begriff genauer zu definieren, habe ich die verschiedenen Übersetzungen des Wortes Alternativ in die japanische Sprache vorgestellt. Die Alternative sei die *andere* Bewegung oder setze auf eine *andere Gesellschaft* statt der gegenwärtigen oder schaffe eine *Gegenkultur*. In meiner Ansicht handelt es sich bei der Alternative nicht nur um Widerstand und Protest, sondern um Schaffen und Bilden der Gesellschaft und Kultur, sowie um das Streben nach Ko-existenz zwischen Mensch und Natur und zwischen den Menschen. Auf diesem Gesichtspunkt stützt sich meine Arbeit. Ich gebe zweitens die Definition der Alternative: Verwirklichung und Entwicklung eines Gegenplans.

Im zweiten Thema wird zuerst der Grund für die Alternativbewegung beschrieben. Er beschränkt sich hauptsächlich auf die sozialen Probleme. Dann gehe ich auf einen anderen Grund über. Ich sehe den subjektiven Anlaß zu der Bewegung unter anderem in der Veränderung der Wertorientierung und der Existenz des Leiters.

Das dritte Thema dient der Erläuterung der Systeme der Bewegung, das heißt, der Erklärung ihrer Prinzipien und ihrer Tragweite. Dezentralisierung und Basisdemokratie werden berücksichtigt.

Daran anschließend ist vom Bewußtsein der Teilnehmer an der Initiative im vierten Thema die Rede. Sein gemeinsames Bewußtsein besteht m.E. aus (1) dem Zugehörigkeitsgefühl des Mitglieds zur Gemeinde und zur Welt, sehr selten zum Staat, (2) der Ko-existenz mit der ganzen Schöpfung, (3) der Gewaltfreiheit, (4) der Deindustrialisierung und (5) dem Feminismus, nicht im Sinne der traditionellen Frauenbefreiungstheorie im realexistierenden Sozialismus, sondern des Radikalfeminismus oder des Marxistischen Feminismus.

Ich begründe in meiner Arbeit die geringe Verbundenheit zum Staat sowohl mit der weltweiten Umweltverschmutzung heute als auch mit der Kritik am Nationalsozialismus. Bundespräsident Richard von Weizsäcker hat am 8. Mai 1985 vor dem Parlament eine berühmte Rede gehalten. Er hat sich sehr kritisch zum Nationalismus geäußert. "Am Ende des Ersten Weltkriegs war es zu Friedensverträgen gekommen. Aber ihnen hatte die Kraft gefehlt, Frieden zu stiften. Erneut waren nationalistische Leidenschaften aufflammt und hatten sich mit sozialen Notlagen verknüpft." Der Weg, auf dem man vom Nationalismus einen Abstand nimmt, soll zum Internationalismus und zum Streben nach dem Schutz des Ökosystems auf der Welt führen. Meiner Meinung nach dürfte es heute im Atomzeitalter kein nationales staatliches Recht, sondern nur ein Recht über die Grenze des Staates hinaus geben. Wer bei der Alternativbewegung die Vorstellung über das ganze Ökosystem der Welt hegt, der müßte sie in seiner Gemeinde realisieren, das heißt, die Idee für die Erde, die Praxis für Gemeinde.

Bevor ich auf die Ko-existenz mit der ganzen Schöpfung hinweise, habe ich in der vergleichenden Kultur zwischen "Ost und West" das Klischee kritisiert, nach dem die östliche Kultur friedlich und die westliche kämpferisch sei. Ich muß zuerst die Vertreter dieser Kultur-Polarisierung darauf aufmerksam machen, daß es unwissenschaftlich und gefährlich ist, eine ganze Nation oder einen gesamten Kulturbereich mit *einem* Begriff wie "kämpferisch" oder "friedlich" zu bezeichnen. Dieser banale Dualismus veranlaßt uns zu der Ignorierung der Tatsachen in der europäischen Geistesgeschichte. Es ist zwar bekannt, daß am Anfang der Bibel die Natur dem Menschen zur Verfügung gestellt wird: "Dann sprach Gott: Hiermit übergebe ich euch alle Pflanzen auf der ganzen Erde, die Samen tragen und alle Bäume mit samenhaften Früchten. Euch sollen sie zur Nahrung dienen. Allen Tieren des Feldes, allen Vögeln des Himmels und allem, was sich auf der Erde ragt, was Leben in sich hat, gebe ich alle grünen Pflanzen

zur Nahrung.” Aber vor der Bibel ist, allerdings in der griechischen Welt, der Pantheismus schon gediehen, wo Mensch und Natur nicht klar geschieden sind. Die griechische Mythologie ist voll von den Beispielen der Ko-existenz zwischen Mensch und Natur. Der Pantheismus übte auch später auf viele Denker, Dichter und Künstler einen großen Einfluß aus. Meister Eckhard, Spinoza, Lessing, Goethe, Heine, Rilke und Rudolf Steiner waren von ihm stark beeinflusst.

Wenn man auch immer einige Zeilen der Genesis in der Bibel für den sicheren Beweis für die “westliche und kämpferische” Kultur hält, so kann man doch nicht daraus schließen, daß jeder Christ oder die Kulturen des Christen kämpferisch seien. Denn es wirkten und wirken in der europäischen Geschichte auch Ideen des Christen, Tier und Pflanze vor der Mißhandlung zu bewahren. Man kann zu den Vertretern dieser Ideen Franz von Assisi und Albert Schweitzer zählen. In dem Werk Schweitzers “Ehefurcht vor dem Leben” stehen die Gleichberechtigungsideen von Mensch und Natur: “In Wirklichkeit aber handelt es sich darum, wie der Mensch sich zu allem Leben, in seinem Bereich befindlichen Lebens, verhält. Ethisch ist er nur, wenn ihm das Leben als solches heilig ist, das der Menschen und das aller Kreatur.”

Zweitens muß ich neben dem Pantheismus und dem Christen, der die Herrschaft des Menschen über die Natur ablehnte, von der Strömung des Marxismus sprechen. Indem Ludwig Feuerbach dem Christentum die Trennung der intimen Beziehung des Menschen zur Natur vorwarf, hat er den Animismus und die primitiven Religionen aufgewertet. In diesem alten Glauben fand er das Abhängigkeitsgefühl des Menschen von der Natur. Der Mensch war auf die Natur angewiesen, weil er auch ein Mitglied der Natur war. Dieses Zugehörigkeitsidee entwickelte Karl Marx weiter. Ich bin gegen die geläufige Behauptung, die westliche Kultur sei einheitlich. Man muß auf die Gemeinsamkeit sowie die Unterschiede Rücksicht nehmen.

Wenn man drittens der Aussage der Polarisierung “West—Kampf, Ost—Frieden” zustimmt, dann dürfte es im “friedlichen Osten” keinen Krieg und keine Umweltverschmutzung geben. Die Umweltverschmutzung ist nichts anders als der Angriff des Menschen auf die Natur. Ganz im Gegenteil ist in Japan die Luft überall verschmutzt. Man leidet an Umweltseuchen wie der Minamata-Krankheit und Itaiitai-Krankheit. Die Gewässerverschmutzung ist aktuell. Die zunehmende Verknappung verfügbaren Grundwassers wird durch die Rekultivierung der Moore und Feuchtgebiete bewirkt. Fische sind durch radioaktive und chemische Stoffen verseucht. Man hat bis heute innerhalb des Ostens unsagbar viele Kämpfe and Kriege geführt.

Die Alternativbewegung zielt seit ihrem Anfang auf die Ko-existenz des Menschen mit der Natur und mit Menschen. Sowohl im Westen als auch im Osten gab und gibt es die Vorstellung der Ko-existenz und des “Ko-lebens”. Man hat bei der Alternativbewegung lediglich die schon im Westen entstandene Anschauung rezipiert und versucht sie zu entwickeln.

Im zweiten Hauptteil habe ich die Ereignisse in der Alternativbewegung auf einer Zeittafel dargestellt.